

死を見つめることと生を見つめること

私たちは、普段の生活の中で「健康」について話すことはあっても、「死」について人と話すことを避けていないでしょうか。「死」は出来れば自分には近寄って欲しくない「汚れ」のようなものとしてみていないでしょうか。

私たちが、生きているということは、取りも直さず死に近づいているということに他ならないし、「生きている」その直線上に「死」はあるはずなのですが…

いったいいつ頃から、「生きている」時間だけを見て、「死」を見ないようにってしまったのか？以前は、家族というと、祖父母がいて両親がいて、子供がいるという形態であったと思います。それがいつ頃からか、核家族という言葉に代表されるように、年寄りが身近にいなくなり、仕事をする適齢期の人間だけで住んでいるのが普通の家族のように言われるようになる。そうすると当然のことながら、元気な者だけで住んでいる状態になります。徐々に自分の自由に身体が動かなくなる人間、つまり年寄りを身近に見ることが少なくなります。まして現代は、病院でいのち終わっていく時代です。身近な者(例えば祖父母)が、布団から起き上がれなくなり、徐々に呼吸が弱くなって、いのち終わっていく。そういうことを体験しない(出来ない)時代が、現代ではないでしょうか？

現代の子供が、「死」を体験するのは、ゲームかテレビドラマの中になってきているのではないのでしょうか？ゲームの中の死は、リセットすれば蘇ります。テレビドラマの中の死は、別なテレビドラマで生き返ります。死が、バーチャルなものになってしまっ、現実から乖離してしまっているのが、現代という時代ではないのでしょうか？

そのような時代だから、「死」に現実感がなくなり、今生きている自分だけしか見えなくなっている。そんな気がするの、私だけでしょうか？今生きている自分しか見えなから、「死」に対する畏れを感じることもなくなり、「死」に近づく人間に対する敬意さえも持たなくなってしまう。現代という時代は、そのような時代になってしまっているのではないのでしょうか。

過去は、今という現在の結果であり、今という現在は、少し先の未来がやってきた結果なのですが、過去も未来も自分には関係ない、と言う態度で過ごしているのが「現代人」ではないのでしょうか。時間は、過去から現在に、そして未来に流れ続けているのだから、現在しか見ないというのは、どこかに歪みが生じると思うのですが、そこに気付いていない「現代人」があまりにも多いように感じます。

もう一度、私の生きている時間の中に、私の「死」もあると言うことをしっかりと見つめてみませんか。